



1989年
から10年間、
徳島県立城北
高校に勤務し

私を育てた あの時代、あの出会い

誰にも負けたくない！ 先輩の授業を覗き、 一番を目指した

徳島県立小松島高校 佐藤 俊 SATO TAKASHI

教師歴のまだ浅い頃、先輩教師の前に「一番になる」と

あえて高いハードルを設定した徳島県立小松島高校の佐藤俊先生。

生徒の可能性を信じ、妥協を許さない教師であり続けるため、

自分自身を追い込もうとしたのだ。

だが、その挑戦が実を結んだのも、

若く、生意気な自分を受け止め、導いてくれる先輩の存在と

学校という組織の強さがあったからだだった。

違うのかを考えたものです。

城北高校の先輩たちの授業ス

タイルは実に多様で、授業が進

むにつれて、徐々に生徒の集中

力を高めていく人もいれば、冒

頭からグイグイ生徒を惹きつけ

る人もいました。ただ、授業の

スタイルは自由で多彩だったけ

れど、進度は見事なまでにそ

ろっていました。それぞれの個

性を発揮しながら、教科会など

で確認を取り合い、学校として

の方針は守る先生たちから、教

師個人の指導力と教師集団の意

思統一を両輪とすることの重要

性を学びました。

同じ数学科で9歳年上の田上

吉輝先生は、生徒のすべてを受

け入れながら指導していく先生

でした。例えば、学校に反発し

ている生徒と

は、文学や芸

術などの話を

通して、本人

の長所を認めていくのです。そ

の上で、生徒が自分に合った進

路に気付くよう導きました。

その姿勢は、私に対しても同

じでした。試験問題を作った田

上先生に見てもらおうと、「何分



先輩教師の言葉

組織の中で 光り輝く個性を 育ててほしい

元・徳島県立鳴門高校校長

TAGAMI YOSHITERU 田上吉輝



「若いのに
自信たっぷり
で、生意気だ
なあ」。

が佐藤先生の第一印象でした。でも、嫌な感じはしませんでした。私には「進学校何するものぞ！」と気負っているように見え、城北高校に赴任したばかりの自分を思い出したからです。

当時、城北高校にはそれぞれ強みを持った教師がたくさんいました。学力下位層の生徒に標準を当てたような授業で難関大に多くの合格者を出す先生、消すのがもったいないと我々が見とれるほど板書が美しい先生、毎年センター試験の問題に挑戦し、全教科で7割以上得点する先生もいました。個性豊かな教師が、学校の方針はしっかりと守っていく。外から見ると窮屈そうな組織も、中にいる者にとっては自由な学校でした。

実は当時の城北高校に対し

赴任した私は、教職5年目にしては、かなり生意気でした。最初の教科会では先輩たちの前に「数学の授業では誰にも負けたくありません」と言い放ちました。自信があったわけではありません。ただ、この学校で一番になりたいと思ったのです。それなら、「誰にも負けない」と言ってみようと思った。自身への宣言のつもりでした。

だから、生徒から「○○先生の複素数はよくわかる」と聞けば、こっそり授業を覗きに行きました。「僕が行くまで消さないで」と生徒に頼んでおいた板書を前に、自分の授業とどこが



で解かせるの?」「何点取らせたい?」などと尋ねられました。問題に自信満々の私を否定することなく、新たな視点を与えてくれた田上先生のおかげで、私は授業中、「この問題は生徒は自分で解けるのだろうか」などと意識するようになりました。また、1年生の担任だった私のところに受け持ちの3年生を連れてきて、「この生徒を教えてくださいました。難関大を志望する受

験生を教えるのはそれが初めてでしたが、その生徒を教えることで私は、基礎を理解した生徒が次にどんなところでつまずくのがわかったのです。おかげで翌年、3年生の担任になったときもあまり戸惑わずに済みました。私が教師として必要な視点に気付くように仕向け、辛抱強く待ってくれたのが田上先生でした。

生徒に教えられたこともあり、それは、心残りがなくらい勉強した生徒は、将来を考え、そのときの実力に合わせて主体的に大学に出願するということです。やれるだけやったのだから、実力相応の大学を誇りを持って受験することができます。それだけに、田上先生がクラス45人全員を国公立大に現役合格させたときは大きな衝撃を受けました。しかも、その中に



は医学部が8人もいたのです。クラスの45人に「やり抜いた」という実感をもたせ、実際に合格させるのですからすごいです。「田上先生のク

ラスを追い越すためには、どうすればいいのだろう」と新たな目標を突きつけられた気がしました。外からは窮屈に見えた城北高校ですが、中に入って分かったのは、生徒を育てるシステムのことで、教師も生徒も生き生きと活動していることでした。

若い先生方を見ていて、もっと向上心をむき出しにしても良いのでは……と思うことがありますが、自分の成長にどん欲であつてもらいたいし、もっと伸びる生徒をそのままにしてほしくない。本人が満足していても、ギリギリまでプラスαの目標や課題を提示して引き上げるのが城北高校でした。

今でも私は、生徒から「あの先生は教えるのがうまい」と聞けば、授業をこっそり覗きに行くんです。それが若い先生でも、盗めるところがあれば盗もうと思います。やっぱり私は一番になりたいですから。

右 さとう たかし 数学科。徳島県立富岡東高校に4年間勤務。その後、城北高校の教壇に10年間立つ。赴任3校目の小松島高校では11年目を迎える。同校で学年主任、進路指導課長を務める。
左 たがみ よしてる 数学科。徳島県立海南高校、小松島高校、城北高校、徳島県教育委員会などを経て、2004年度から日和佐高校校長、05年度から鳴門高校校長。現在、四国大学准教授。

「国公立大の現役合格者数を増やすため、生徒の志望を下げさせている」という風評が流れたことがあります。しかし、それは事実ではありません。生徒は3年間納得いくまで勉強したことで、浪人してもう1年受験勉強するよりも、早く大学生になって学びたいと考えたのです。今、佐藤先生が、自分と同じことを感じていたということが分かって、とても嬉しいです。私には、若いときに生徒の立場になりすぎて、教師としての距離を生徒と保てなかった経験があります。それに対して、佐藤先生は生徒目線を忘れずに、しかし教師としての立場でしっかりと指導していました。生徒目線と教師としての立場の絶妙なバランスは、生徒と深く、一生懸命接する中で分かってくるものです。だから、佐藤先生は私にとって、本当は「こうありたかった」という姿だったのかもしれない。

